山梨新報「直言」原稿

平成十六年九月二三日

「変化への予兆を聴く」

山梨大学　理事・副学長　伊藤　洋

認知心理学の創始者アメリカのブルーナーとポストマンの奇抜な心理学実験の話から始めよう。

多勢の人々を一堂に集めて、彼ら被験者にトランプカードを見せ、それが何の何番かを答えさせるというものである。被験者は、クラブの8とか、ハートのキングというようなカードを見せられて、それを解答欄に記入するというのだから、トランプゲームをやったことのある人なら誰でも答えられる。

こういう何の変哲も無い出題の中に、時折黒い色で印刷されたダイアのキングやら、赤い色で描かれたクラブのクイーン、ハートによく似た葉っぱを三枚描いたカードなどを忍ばせておく。変造カードに気づかない被験者はそれらをダイアの13、クラブの12、スペードの3などと答えて平気でいる。

こういう間違ったカードを段々と頻出するようにしていくと目ざとい人は気がついて苦笑する。なにしろカードがでたらめだから、でたらめさに気が付いた人達には解答欄に答が記入できないのだ。

誤りカードを見せる頻度をどんどん増やしていくと、徐々に多くの人々がこのからくりに気がつくようになる。すると、会場は静かな笑い声に包まれる。

だが、ここに周囲の笑いの意味が理解できず、ただ苛立って実に不愉快な気分に陥ってしまう一団の人々がいる。中には、会場の笑いが大きくなればなるほど、パニック状態に陥って、ついに解答用紙を投げ出して会場から逃げ出してしまう人も出てくる程である。

この実験で、正規のカードを見せられていた初期の時間帯、実験会場に安定した日常的な時間が刻まれていた。しかるに不正なカードがちらほらと出没するようになった時点から、爬行的で不安定な変化の時間がやって来た。そして、ついに被験者の苦笑が声になって発せられるようになった時点で、実験会場の日常性は消滅し、この変化についていけない人々が怒

って立ち上がる程の動乱期が来たのである。

こういう時間の刻みの変化を、もっと長い時間、つまり歴史と呼ばれるような長さで見たときに、ブルーナーとポストマンの実験は、単に認知心理学的実験に止まらず、人々が歴史的変化にどのように対処しながら生きていくのかを教えてくれる。つまり、時代の変化を敏感に感じ取る高い能力を持つ人々がいる反面、最後までその変化を感じられないか、感じてもそれを承認したくないという一団の人々がいるということである。

冷戦が終わった直後から、この国の政治・経済・文化には矢つぎ早に爬行的な変化が発生し始めていた。あれから１５年、経済は未曾有の長期不況に入り、政治はポピュリズムに陥り、ワンフレーズポリティックスの貧困さを露呈しつつ、戦略なき連立政権にすがってその日暮らし。小泉内閣の行財政改革は、その掛け声だけは勇ましいが、座もして改革などできるわけなく、ついに出した赤字は歴代内閣最高額。そのツケは地方自治体への補助金カット、郵政民営化、国立大学法人化、年金減額等々となって現れた。

「一体全体、この変化は誰が仕掛けたのだ。俺は知らんぞ。内容が分からない。目的が分からない。」手続きがなっていない。」こういう怨嗟の声が巷に溢れている。

しかし、ブルーナーとポストマンの実験の教えるところでは、ごく初期に不正なカードが出てきたことを目ざとく見つけた者達がいる。そういう「先覚者」の声を一顧だにせず、過去に固執し、権力に執着して、理念も無く、改革もせず、ただ徒に変化を呪う。こういう鈍感さが、今となって手痛い大手術を迫られる原因となっている。

私たちの身辺でもそうだ。地方自治体の行財政はもはや絶望的状況に陥っている。しかも、今後、状況は悪化すれども改善される見込みはまず無い。これは、１９８９年、ベルリンの壁の崩壊時に始まった。それにも拘らず、この間対策は講じられて来なかった。それどころか、合併特例債に期待して、公共事業に狂奔さえしている。

少子化は、中等・高等教育機関を直撃する。そんなことは、第二次ベビームが終わった１９７４年には分かっていた。それなのに対策はこれからだ。このままでは、私達は歴史の多くの場面で、ただただ困惑しながら退場するしかない。今こそ、「先覚者」の声に耳を傾け、正しい改革を断行する時だったのだが。